

1/6 (2) まいど! 倫理号です。やっこの時句になりおれ、お陰様を伝えたい。でい

目録を得意にしては私的、件々途中に送るような  
読者は嫌み。頑張り封!! 2021.11.6~11.12

今週の

倫理

11月のテーマ | 本からの学び

1254号

幸せ歌マホ鳥

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれ話を掲載いたします。

「人を動かす秘訣の、もっとも大切なポイントは何か。それは、ただ一つ、あなた自身がまず動き出したくなることだ。その気持ちにハッキリとすることだ」

これはデール・カーネギーの言葉である。もちろん、自分が動かさずして、人を動かすことなどできはしない。何よりもまず、自分自身がそのように動く気持ちにならないと人は動かないし、動かすこともできない。これが根本だというのである。たしかにこれは真理である。

この文句は、彼の著作から選んだものである。本を読まなければ、この文句は分からない。彼のことに限らず、本を読むことによつてこうしたすばらしいことを知ることには多い。テレビその他でも、そうした機会を得ることはできるだろうが、しかし、そうした番組に出会わなければだめだ。耳から入り、目で眺めて知れることもよいが、それは向こう側から与えられるのを待つようになる。

シャカ、キリスト、ゲーテ、孔子、リンカーン、マルクス、毛沢東、ニュートン、その他の思想・信仰や社会に対する考え方もっとも手早い。またそれらは何回も読んで、血肉化しようとする事ができる。



## 読書の労を惜しむな

丸山竹秋

もちろん読むことには、何がしかの努力はいる。活字を眺めているだけでは、読むことにはならない。目の働き、心の注ぎ方など、そこにはいくらか「つとめる」ということが必要だ。そこで始めて自分の中に何がしかの栄養を吸収することができるのである。

読書は精神的栄養の吸上管（すいあげかん）である。精神的というのは、広く文化的という意味も含んでいる。だから精神的栄養とは、心の糧という意味も含むと同時に、広く人類文化建設の栄養源になるというわけだ。

学生時代はいくらか読書をして、サラリーマンになって忙しくなると、通勤の途中、スポーツ新聞や漫画だけで一日を終わるといった具合で、頭の中はいつもカラッポ。そわそわした暮らしにいつも追われて、深味も豊かさも、暖かさも欠いてしまったような薄っぺら人間になり下がってゆく。

本を読むのが好きな人、きらいな人の別はもちろんある。また年をとってゆくと次第に視力も衰え、読書から遠ざかる傾向にあることも事実である。しかし何かにつけて本を読み、本をよりどころの一つとし、人生を探究して人間性を豊かにしようとするだけでも、生活の幅が広がることは確かである。

人間の文化活動の中でも、読書というものには他にいろいろな意義があるはずだ。そこから吸収したものを実生活にあてはめて、消化してゆきたい。（『選集』より）